

9. 報告④－牧場調査－

【報告者】

株式会社明治 執行役員酪農部長 木島 俊行
全国酪農業協同組合連合会 購買部 酪農生産指導室 課長 丹戸 靖

ウェールズにおいて、異なる経営スタイルの2牧場の視察・調査をおこなった（①放牧・季節繁殖を行い加工向の生乳販売を行うクリス牧場、②放牧と舎飼で飲用向に生乳を販売するマンセル牧場）。

なお、生乳の用途区分については、日本のように生乳の仕向け先で明確に区分されているというより、ミルクマーク時代のタイプ別販売の延長で年間一定量の出荷＝飲用向、増減の大きな出荷＝加工向とされている。

- クリス牧場の経営発展の原動力は、放牧地の拡大と草地の徹底管理である。これらにより、加工向に適した乳成分や乳用牛の長命連産を実現している。
- マンセル牧場は、個体乳量を求める経営をしながらも穀類を自給しているため、飼料コストが安価である点が強みである。
- 乳価低迷の時期を耐え抜いた両牧場の共通点は、コスト意識が高く、経営戦略が明確であること、そして、施設に対する投資は最小限に抑え、変化に対応する準備を怠らない点である。
- 日本と同様に従業員の確保が困難な状況で、人件費が年々上昇している。イギリスのEU離脱により他国の安価な労働力の確保ができなくなる可能性があり、コスト面では大きな懸念材料となっている。



1. 経営概況

経産牛	2,500頭	出荷乳量	5,000kg/頭・年
育成牛	400頭	圃場面積	1,000ha (2.5頭/ha)
肉用牛	500頭	労働者数	1家族+従業員9名

2. 経営の特徴

クリス牧場は、放牧・季節分娩を行うNZ・アイルランド方式の牧場である。乳用牛の品種はニュージーランドフリージャンとジャージーの交雑種のため、個体乳量は5,000kg/頭・年と低いが、乳成分は一年を通して高い（乳脂肪4.7%、乳蛋白3.7%）。この特性を活かし、生乳出荷は加工向に特化した契約を結んでいる。季節分娩を取り入れる酪農経営はイングランド全土でも5%程度しかおらず、希な経営形態であることが分かる。

牧場は、家族経営の酪農ビジネス会社として運営されており、クリス・ジェームス氏が代表を務める。クリス氏は牧場経営の他、AHDB Dairyの現役員、地域協議会及びGrassland Societyの元会長の経歴を持つ。



代表のクリス・ジェームス氏。



大自然の中でストレスフリーな牛たち。（仲良し）

3. 飼養／繁殖管理

当牧場では、季節分娩を行っているため、2月～3月に分娩、4月～5月にかけて人工授精が集中する。分娩後6週までに受胎する牛は約68%、未受胎牛に対しては、雄牛による種付けを行う。それでも、最終的に全体の6～7%は未受胎となり、肉用として販売されている。

放牧体系なので、主たる飼料となるのは、ペレニアルライグラスを主体とした牧草であり、2,500頭の経産牛を5群に分け管理している。2月の多雨期や7月の乾燥期は良質な牧草が得られないため、配合飼料で賄うことになる（給与量は400kg～1000kg/頭・年程度）。

それゆえ、飼養管理で最も力を入れているのが草地の管理である。日本製の小型バギーにレーザーセンサーを装着し、牧草の高さを計測している。基本的には毎週、草の成長が早い5月には毎日、このバギーで圃場を駆け巡り、放牧や収穫のタイミングを見極めている。クリス氏曰く「このバギーのおかげでビジネスが成長できた」と言わしめるほどである。

配合飼料の給与量が少なく、放牧で牛のストレスが少ないことから平均産次は5産、日本の平均値2.7産と比べると非常に長い。更新率は20%程度なので、育成牛には余剰があり、周辺の農家に販売している。ちなみに、育成牛の販売価格は1000ポンド（約15万円＝一産次の乳代金）とのことであった。

広大な牧草地。ウェールズ地方は「天空の城ラピュタ」の舞台のモデルにもなっている。



現地の牧草を触って味見してチェック。

4. 収支

2016年の乳価は13ペンス～20ペンス/kg。一方、当牧場の生産コストは20ペンス/kg（30円/kg）。今年は非常に厳しい経営環境であるにもかかわらず、クリス氏は「英国の人口は増加中で、乳製品の需要も強い。市場価格は必ず上がる。」と酪農環境にはポジティブな考えを持つ。

飼養管理と共に支出面で大きな要素となっているのが、土地への投資である。1,000haの圃場面積の内、所有しているのが半分、残り半分が借地となっている。農地価格は耕種作物や太陽光発電用地との奪い合いが激化しているため、20,000ポンド/ha（約300万円/ha）、賃借料も400ポンド/ha（約60,000円/ha）と高値で推移している。土地の確保に余念がないクリス氏は「農地を拡大するコツは、地主を幸せにすること。」と、地域における“共存共栄”の意識が高い。

地代と共に、近年コストが上昇しているのは、人件費である。新人従業員で年収約300万円、牧場長クラスは500万円の設定をしている。年収面は日本と同水準であるが、休暇日数は120日/年（日本は約90日/年）の設定となっている。「いい人を雇うためには、その働きに報いなければならない」というクリス氏の“共存共栄”の理念がここでも表れている。



5. 今後の経営戦略

クリス氏の放牧・季節繁殖の経営スタイルを貫く意志は固い。現在のスタイルは消費者にも指示を受けており、今後も“放牧”に対するニーズは強まると考える。オーガニックでの生産もありえるが、1頭あたりの圃場面積が1.5倍必要になることから、当面、オーガニックでの生産は取り組まない方針である。

直近では、さらなる規模拡大を計画しており、放牧地の拡大を進めている。また、その際にも常に土地面積当たりの収益には注意を払っている。放牧地の拡大に伴い搾乳施設との距離が遠くなることから、搾乳回数を2回/日から1回/日へ減らす予定である。乳量の減少や乳房炎のリスクを考えると、日本では考えられない経営戦略であるが、「乳量の低下は20%程度、それ以上に乳成分が上がるため、人件費等のトータルコストを考えても、1頭あたりの収益は変わらない」との判断である。乳成分量で加工向の乳価が決まっているので、このような判断になるのであろう。

一方で、財務的なリスクを回避するため、増頭しても牛舎には投資しない方針を持つ。投資判断は堅実に、経営判断は大胆・迅速という経営者意識を伺うことが出来た。



クリス氏も一方の調査先のマンセル氏も、2013年に横浜で開催されたWDS2013に参加している。

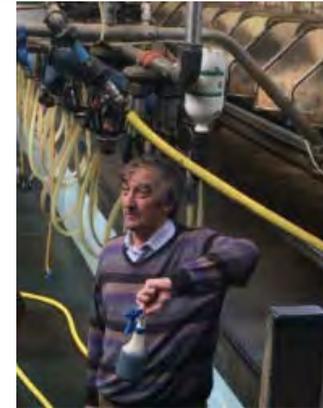


牛と調査団のご対面。どんどん牛が近づいてきた。

③ Mansel Raymond's Home Farm

1. 経営概況

経産牛 620頭 出荷乳量 8,500kg/頭・年
育成牛 400頭 圃場面積 1,440ha (草地1,000ha、畑作440ha)
肉用牛 470頭 労働者数 2家族(兄弟) + 従業員 計25名



代表のマンセル・レイモンド氏。

2. 経営の特徴

個体乳量を重視した舎飼中心の牧場経営を営む。5年前までは、クリス牧場と同様に加工向に特化した生乳出荷を行ってきたが、現在は乳業メーカーと飲用向の契約を結ぶ。

生乳出荷を加工向から飲用向に変更した背景は、イングランドの生乳生産が減少し、飲用向の集荷範囲がウェールズまで広がってきたこと（イングランドからウェールズへの高速道路が開通し輸送時間が大幅に短縮したことも大きな要因）により、飲用向出荷の環境が整ったことが挙げられる。

マンセル牧場としても、①安定した乳価への期待、②牛の品種がホルスタインなので高泌乳が可能であった、③土地がウエットで放牧に向いていないと同時に土地面積の制約で700頭が飼養限界、との事情があったことから、加工用から飲用向けへの転換を図っている。クリス牧場とマンセル牧場は同じ地域の牧場であるにも拘わらず、環境や経営戦略が大きく異なる点は興味深い。

マンセル牧場は、酪農以外にもジャガイモ、菜種、大麦麦芽、栽培を手掛けており、それらの経営管理は双子の弟と主に共同経営で行っている。



3. 飼養／繁殖管理

夏場は放牧、冬場はフリーストール牛舎（300頭×2棟）での飼養管理を行う。冬場に給与する牧草は昔ながらのタワーサイロとバンカーサイロに保管されている。大麦等の穀類も自給しており、飼料会社から購入するのはタンパク原料の大豆粕と配合飼料のみである。飼料原料はTMRミキサーで攪拌され、ベルトコンベアー式の自動給餌機でフリーストール牛舎内に給与される。

搾乳施設は8頭ダブル・スイングパーラー方式、1.5人で搾乳作業行う。パーラーで個体ごとの乳量データを蓄積することができ、飼料設計や繁殖管理に役立てている。個体乳量が求められる経営だけに、個体管理が徹底している。



4. 収支

マンセル牧場の乳価はバイヤー（アーラ、ファーストミルク等の組合系メーカー）との交渉で決定されている。2016年9月時点の飲用乳価は28ペンス/kg（約42円/kg）とのこと。それに対して、マンセル牧場のコストは26ペンス/kg（約39円/kg）。

濃厚飼料の多くは自給飼料で賄うため、飼料費は安価であるが、人件費がじわじわと上がり経営を圧迫し始めている。雇用にかかるコストは5ペンス/kg（7.5円/kg）で、生乳売上高に占める割合は約18%となる（ちなみに、日本は10%～15%）。

今後、イギリス人よりも安価な欧州人の雇用を検討する時期には来ているが、「イギリスのEU離脱の影響でさらに、人件費が高騰する可能性がある」と、マンセル氏は危惧している。

5. 今後の経営戦略

今後、乳用牛を620頭から700頭へ増頭、さらに個体乳量を8,500kg/年から9,000kg/年へ増やすことを計画している。今後のコストアップや乳製品を巡る世界情勢、そして施設や土地の利用効率を考えると、この規模が適切とのマンセル氏の判断である。その反面、乳用牛の疾病リスクは高まるが、「牧場長が優秀なので、大きな問題は起こらないだろう」と、従業員への信頼は篤い。

規模拡大に際し、新たな施設への投資は行わない。「今の酪農情勢では、財務的リスクを負うことはできない。」と、この点に関してはマンセル氏と同様の考え方を持つ。

今後の課題は、①牧場長に次ぐNo.2のスタッフを育てること。②後継者育成である。特に後継者については、兄弟による共同経営であることから、牧場を2つに分けるか？現状通り共同経営で継続するか？協議が続いている。



マンセル氏のご自宅にて、イングリッシュティーとウェールズ地方の伝統菓子“ウェルッシュケーキ”をいただきながらお話を伺った。



「人口より羊の数が多い」と言われているウェールズ。牛たちものびのびと暮らしている。



兄弟共同経営の看板。